

『論語』の新たな授業づくりの方法 — 学而篇の訓読法を中心に —

鈴木 恵

一、はじめに

筆者はこれまで、古典教材の授業づくりに、当該古典作品の諸本（写本・板本）を活用することを提案してきた。教科書の本文を含めた活字本の危うさを説き、積極的に写本や板本を活用することにより、古典教材の新たな読解をうながし、それを授業に活かす方法について発信してきた。その際、特に定番教材『平家物語』（第二学年配当）、『徒然草』（同）、『おくのほそ道』（第三学年配当）を取り上げた^①。また、純粹な古典教材ではないが、これもまた定番の翻訳教材である、魯迅『故郷』（第三学年配当）も取り上げたことがある^②。定番教材ならば、日本中のどの中学校においても、通常授業の所定の時間数の中で、取り扱うことができると考えたからである。

ただ、古典教材には、右に掲げた如き古文分野の教材がある一方で、漢文分野の教材も採択されている。そこで、本稿では同様に定番教材である『論語』を取り上げ、新たな授業づくりを考えてみることにした。

二、中学校における漢文教材

『論語』の検討に入る前に、現行の中学校教科書において、どのような漢文教材が取り上げられているか概観してみたい。

まず、第一学年では「故事成語」が取り上げられる。学校図書・教育出

版・三省堂・東京書籍・光村図書、五社すべてで『韓非子』の「矛盾」が採択されていて、それ以外は学校図書にのみ『孟子』の「五十歩百歩」が採られるにすぎなかった。教育出版の出典は『漢文大系』（富山房）、東京書籍・光村図書の出典は『新釈漢文大系』（明治書院）である。学校図書・三省堂には出典表示がなかった。

次に、第二学年・第三学年では、教科書によって『論語』か漢詩に分かれていた。次下の如くである。

学校図書『中学校国語』

二年 『論語』 為政篇「吾十有五而」、同「学而不思則罔」、同「知之為知之」、衛霊公「己所不欲」

※出典／未詳

三年 漢詩 杜甫「春望」、王維「送元二使安西」、李白「静夜思」

※出典／未詳

教育出版『伝え合う言葉 中学国語』

二年 『論語』 学而篇「学而時習之」、為政篇「知之為知之」、顔淵篇「己所不欲」

※出典／漢文大系

三年 漢詩 李白「黄鶴楼」、孟浩然「春曉」、杜甫「春望」、良寛「擔薪下翠岑」

※出典／『漢文大系』、『定本良寛全集』（中央公論新社）

三省堂『現代の国語』

二年 漢詩 孟浩然「春曉」、李白「黃鶴樓」、杜甫「春望」

※出典／『漢詩選』（集英社）、『新釈漢文大系』

三年 『論語』 為政篇「吾十有五而」、同「溫故而知新」、衛霊公「己所不欲」、学而篇「学而時習之」

※出典／新釈漢文大系

東京書籍『新編新しい国語』

二年 漢詩 李白「黃鶴樓」、杜甫「春望」、柳宗元「江雪」、王翰「涼州詞」

※出典／『漢文大系』、『漢詩大系』（集英社）、未詳のものあり

三年 『論語』 学而篇「巧言令色」、子路篇「君子和而不同」、為政篇「学而不思則罔」、衛霊公「過而不改」、同「己所不欲」

※出典／新釈漢文大系

光村図書『国語』

二年 漢詩 孟浩然「春曉」、杜甫「絶句」、李白「黃鶴樓」、杜甫「春望」

※出典／未詳

三年 『論語』 学而篇「学而時習之」、為政篇「溫故而知新」、同「学而不思則罔」、雍也篇「知之者」

※出典／新釈漢文大系

すなわち、学校図書と教育出版の二社が、第二学年に『論語』、第三学年に漢詩を配置するのに対して、三省堂・東京書籍・光村図書の三社が、その反対に第二学年に漢詩、第三学年に『論語』を配置しているのである。その配置には、それぞれ何らかの意図があるものと思われる。第一学年の「故事成語」ほどの画一性は見られないものの、『論語』も漢詩も、やはり一見して共通教材が多いことがわかる。

しかも、中国三千年（あるいは四千年）などと言い、中国の長い歴史を強調するにもかかわらず、漢文教材として採録されるのは、散文では唯一春秋時代の『論語』、韻文ではほぼ唐代の漢詩教編に限定されていることは確かである⁽³⁾。

古典教材でも、古文分野については奈良時代から江戸時代まで、韻文あり散文ありで、それなりのヴァリエーションが用意されているのであるが、

こと漢文分野に限れば、極めて狭い範囲の教材しか用意されていないのが現状のように思われる。

また、出典については、ほとんどの教科書で明示されていたが、未詳のものもあった。特に学校図書の教科書には、第一学年から第三学年に至るまで、全く出典表示がなかった。提示された本文がどこから採られたのか、何に依拠したのかを明示することは、最低限の義務ではないだろうか。ちなみに、本稿で取り上げた『論語』については、教育出版が『漢文大系』、三省堂・東京書籍・光村図書は、何れも『新釈漢文大系』が出典であった⁽⁴⁾。

三、教科書における『論語』

さて、教科書における『論語』であるが、前節に見たように、各社で共通する教材が多いようである。次の如くである。

学校図書・教育出版・三省堂・東京書籍四社で採られている、顔淵篇ないし衛霊公の「己所不欲、勿施於人。」が最も多く、次いで、学校図書・東京書籍・光村図書三社の為政篇「学而不思則罔。思而不学則殆。」、教育出版・三省堂・光村図書三社の学而篇「学而時習之、不亦説乎。」、続いて、学校図書・教育出版二社の為政篇「知之為知之、不知為不知。是知也。」、三省堂・光村図書二社の為政篇「温故而知新、可以為師矣。」、学校図書・三省堂二社の為政篇「吾十有五而志于学」であつて、それ以外の学而篇「巧言令色、鮮矣仁。」、子路篇「君子和而不同。小人同而不和。」、衛霊公「過而不改、是謂過矣。」は東京書籍一社のみ、雍也篇「知之者、不如好之者。」は光村図書一社のみであった。東京書籍の教科書には比較的独自性がうかがわれるが、他は大同小異というところである。総じて、「学問」「知識」「思考」「行動」に関する内容が多く、中学生の年齢に相応する章句が選択されている点、一定の配慮、方針があるように思われる。

また、『論語』と孔子については、各教科書では次のように説明されている。『論語』は「冒頭」ないし「末尾」の文に、孔子は「脚注」に概説されることが多いようである。試みに、共通してキーワードとなりそうな文言に右傍線を付し、特記事項に波線を付してみた。

学校図書

〈冒頭〉

二千五百年ほど前、中国は戦乱の中にありました。権力を巡って、親子が殺し合い、王と家臣が殺し合う悲しい現実の中で、社会の秩序と人間の生き方を説き続けた男たちがいました。孔子とその弟子たちです。その言行は時間や空間を超えて、朝鮮半島や日本にも伝わりました。そして、多くの人々のものの見方・考え方に影響を与え続けました。孔子とその弟子たちの厳しい思索から生まれた「信」「礼」などの言葉は、今も暮らしの中で生きています。

〈脚注〉

孔子 春秋時代（前七七〇～前四〇三年）の思想家。

子 子は先生。孔子のこと。

為政 論語は、全二十編に分かれていて、為政は衛霊公などと共に、その編名。

〈末尾〉

春秋時代の中国の思想家孔子と、その弟子たちの言行や問答を記録した。孔子は紀元前四七九年に没したが、死後、二百年以上たった漢の時代に成立した。日本には西暦二八五年に伝わったと言われている。

教育出版

〈冒頭〉

今から二千五百年以上も昔、中国で孔丘という思想家が活躍しました。一般的に、「孔先生」という意味で「孔子」と呼ばれています。彼と弟子たちの言行を記録した書物が『論語』です。『論語』は、人間のあるべき姿を追求する書物として、中国だけでなく、日本をはじめとして、数多くの国々で読み継がれてきました。

〈脚注〉

孔子 前五五一頃―前四七九、中国古代の思想家。姓は「孔」各地を旅しながら自らが理想とする政治を説いた。晩年は、弟子たちの教育に力を注いだ。

三省堂

〈冒頭〉

『論語』は、今から二千五百年以上前の中国の思想家、孔子とその弟子たちの言行録であり、仁（真心、思いやり）を中心にした儒教の思想を記しています。古くから日本にも伝えられ、現在にいたるまで、多くの人々のものの見方や考え方に影響を与え続けてきました。

〈脚注〉

孔子 「前511頃―前483」春秋時代の魯（現在の山東省の西部にあつた国）の人。諸国を巡って、政治や道徳の思想を広めようとしたが受け入れられず、晩年は故郷で弟子たちの教育に専念した。

為政 編の名称。各編の名称は、それぞれの初めの句または次の句の数字がそのままつけられている。ただし、「子曰はく」で始まるものはその部分を除く。「衛霊公」「学而」も同様。

東京書籍 本文出典・新釈漢文大系（明治書院）

〈冒頭〉

『論語』は、孔子とその弟子たちの言行を記録したものです。孔子は古代中国の魯の国に生まれた思想家で、役人として魯の君主に仕えたこともありました。人間が互いに愛情をもつて接し合い、人格や道徳を高めることによって、世の中が平和に治まるということを理想とし、それを諸侯に説いて回りましたが、受け入れられませんでした。しかし、顔淵・子路など、多くの優れた弟子を育て、その理想は、儒教として次第に広く人々の間に知られるようになりました。『論語』は、古くから我が国にも伝えられ、日本人が思考したり行動したりする際の規範として、大きな影響を与えてきました。

〈脚注〉

孔子 前五五一年頃―前四七九年 字は仲尼。古代中国の思想家。

魯 前十一世紀頃成立。儒教の中心地。

仁 自分を律し、他者をいたわる心。儒教における最高の徳目・規範。
義・礼・智・信とともに五常とよばれている。

光村図書 本文出典・新釈漢文大系

〈冒頭〉

「論語」は、中国古代の思想家・孔子と、その弟子たちの言行録である。弟子たちは師の言葉を、励ましとして、あるいは戒めとして、よりどころにできたことだろう。そうした言葉を後世に残そうと編まれたものが「論語」という書物である。「論語」に収められた短い言葉の中には、人間の生き方についての鋭い観察や深い思索が込められている。だからこそ、二千五百年以上前の言葉が今も読み継がれているのだ。

〈脚注〉

子 男子に対する敬称。ここでは、孔子のことを指して「先生」というほどの意に用いている。

〈末尾〉

孔子（前五五一？―前四七九）は中国古代の思想家で、人格や道徳を高めることによって世を治めることを理想とした。その思想は「論語」によって後世に伝えられ、中国のみならず、日本の学問や思想にも大きな影響を及ぼした。

以上により、大略「論語」は「中国古代」「二千五百年以上前」「春秋時代」の「魯の国」の「思想家」「孔子」「前五五一頃―前四七九」と「その弟子たち」の「言行録」で、「全二十編」から成り、「孔子」の「死後、二百年以上たった漢の時代に成立」した。「日本には西暦二八五年に伝わった」とされ、「儒教」の「五常」と言われる「仁」「義・礼・智・信」を中心に据え、多くの人々の「ものの見方・考え方に影響を与えた、の如くにまとめられる。

ただ、「二千五百年以上前」「孔子とその弟子たち」の「言行録」ということが喧伝されるあまり、春秋時代の言葉がそのまま使用されていると受け取られている節がある。令和元年度・新潟大学教育学部附属長岡校園教育研究協議会における、中学校二年三組（国語科）の公開授業でも、単元名を「二千五百年前からのメッセージ」として、二千五百年前と現代とを一挙に結び付ける「論語」の研究授業が行われた^⑤。現場の多くは、ほぼ同様の如くである。

この点、学校図書の教科書には、実は「論語」は「（孔子の）死後、

二百年以上たった漢代に成立した」こと、「日本には西暦二八五年に伝わったとされている」こと、「全二十編」に分かれていることなどが記され、中国における「論語」の成り立ちや日本への伝来のことにも言及している点、それなりの配慮がなされている。また、「論語」の内容に関して、東京書籍の教科書脚注には、儒教の徳目「仁」「義・礼・智・信」（五常）の記述が見られた。学校図書は「信」「礼」、三省堂は「仁」のみ（それぞれ冒頭の文で）触れており、教育出版・光村図書には、かかる記述は皆無であった。儒教の徳目についての既述がなければ、一体「論語」の中身とはどのようなものなのか、全く説明していないのと同然である。

四、「論語」と孔子

それでは、「論語」とはどのような書物で、孔子とはどのような人物であらうか。そこで、『論語』教材の出典として最も多かった、『新釈漢文大系』の解説を掲載しようと考えたが、その記述はあまりに長大かつ詳細に亘るものであった。ここではさほどの専門性は必要ないため、電子辞書にも登録されている、一般的な百科事典『ブリタニカ国際大百科事典』と国語辞典『広辞苑』（第七版）によることとした^⑥。次に引用する。

『ブリタニカ国際大百科事典』
「論語」

中国、儒教の根本文献。20編。孔子とその門弟との問答を主とし、孔子の行為、その高弟の言葉を合せて記録しており、孔子の教えを伝える最も確実な古文獻。短い文章の間に、孔子の人物、道徳説樹立の苦心、それぞれ個性のある弟子たちの勉学の様子などがまぎまぎと偲ばれる。その編者について諸説があるが、孫弟子以後であることは確かであり、しかも上論（前半部の10編）と下論とは文体に相違があるので、何人かの編集である。前漢時代には、斉論、魯論、古論、そのほか、多少の相違のあるテキストがあり、それらを前一世紀の人張萬が校定し、さらに後漢の鄭玄が校定して現存する『論語』の本文が定まった。魏の何晏の『論語集解』（古注という）が久しく行われて

いた。その後続々注釈書が出るようになったが、なかでも宋の朱子の『論語集注』（新注という）が最も広く行われた。日本には中国文化渡来の最初に來たとされておき、日本人のすぐれた注釈書も多い。

孔子

〔生〕前551 曲阜〔没〕前479

中国、春秋時代の学者、思想家。儒教の祖。名は丘。字は仲尼。諡は至聖文宣王など。先祖は公族であつたが家はきわめて貧しく、魯に仕え大司寇となつたが権力者と衝突し、56歳から十余年間魯を去つて諸国を歴遊した。諸侯に道德的政治の実行を説いたが用いられず、晩年は魯で弟子の教育と著述に専念し、『春秋』やその他儒家の經典を著したと伝えられる。『論語』は孔子とその弟子との言行録である。堯舜、文王、武王、周公旦らを尊崇し、古来の思想を大成し、為政者の徳によつて民衆を教化する徳治主義を根幹とし、周の遺制たる礼楽制度による周への復古を説いた。その教えは、儒教として中国思想の根幹となり、後世に大きな影響を及ぼした。

『広辞苑』（第七版）

『論語』

四書の一つ。孔子の言行や、孔子の弟子たちとの問答を収録した書。20篇。学而篇より堯曰篇に至る。弟子たちの記録したものに始まり、漢代に集大成。孔子の説いた理想的秩序「礼」の姿、理想的道德「仁」の意義、政治・教育などについての意見が生き生きと述べられる。日本には応神天皇の時に百濟より傳來したと伝えられる。

『論語集解』

『論語』の注釈書。曹魏の何晏撰。10卷。漢代諸家の説を集める。完備した論語の注として最古。皇侃の疏が日本の足利学校に伝わる。のち宋の邢昺の疏を付加。朱熹の集注（新注）に対する古注。

『論語集注』

朱熹の「論語」注釈書。四書集注の一つ。新注。

孔子

中国、春秋時代後期の学者・思想家。儒家の祖。名は丘。字は仲尼。

魯の昌平郷陬邑（山東省曲阜）に生まれる。文王・武王・周公らを尊崇し、礼を理想の秩序、仁を理想の道德とし、孝悌と忠恕を理想達成の根底とした。魯に伝えたが容れられず、諸国を歴遊して治国の道を説くこと十余年、用いられず、帰国して教育と著述に専念。その思想や言動は言行録『論語』に記されている。後世、文宣王・至聖文宣王と諡され、また至聖先師と呼ばれる。（前551～前479）

以上の如くである。

前節でまとめた、教科書のキーワード的な文言は、ほぼ網羅されているのであるが、それ以外にも、『論語』の成立に絡んで、前漢時代には、斉論、魯論、古論などの『論語』のテキストがあり、それらを張萬・鄭玄が校定して今のような本文が定まったこと、（しかしそれは今に伝わらず）三國・魏の何晏が諸家の説を集めて『論語集解』（古注）を撰述し、それから千年ほど降った宋の時代の朱熹が『論語集注』（新注）を撰述し、それが広く行われたこと、日本には応神天皇の時に傳來し、日本人による優れた注釈書もあることなどの記述は、是非とも掲載すべき事柄であろう。とりわけ、何晏『論語集解』、朱熹『論語集注』についての説明は、後述（第六節）の如く必須と考えられるのであるが、現行の教科書にはそれが全く見当たらない。これでは、『論語』は成立当初から今に至るまで、ずっと変わらずに『論語』という書名であつた如くに誤解されてしまうのではあるまいか。

また、『論語』の内容に絡んで、孔子は貧困と不遇の中、多くの弟子をかかえながら、十数年の間諸国を歴遊しつつ、為政者に対して徳を説き続けたわけだが、その中核をなすものは「仁」と「礼」であつた。であれば、そのことは教科書に明確に記述すべきであるし、できればどの章句のどの部分に「仁」や「礼」が表れているかを示さねばならない。前節で、東京書籍の教科書には「仁」と「義・礼・智・信」の記述が見られ、学校図書は「信」と「礼」、三省堂は「仁」に触れていると述べたが、残念ながら、取り上げた章句と当該の記述が十分に結びついていないのである。もし、中学生に対して、少しでも孔子の教えを理解させようと意図しているのであれば、そうした配慮は不可欠であろう。

五、教科書における「学習のてびき」

それでは、中学校の各教科書においては、どのような『論語』学習が行われるように設定されているのであろうか。次に、いわゆる「学習の手引き」によってそれを確認してみたい。

学校図書「学びの窓」

〈読み深める〉

① 思索の内容を自分の知識や経験などで補い、生き生きと捉えよう。

① 「成長と共に」「深まる心」「行動する心」の文中から、次のような点を出し合おう。

1 今の日本でも使われている熟語

2 今の日本にも通用する考え方

3 自分の生活に照らして考えさせられたこと

② それぞれの孔子の言葉は、どんな人物に対してどのような場面でいわれた言葉か想像して出し合おう。

② 漢文でよく出てくる字に注意して訓読し、漢文の訓読に親しもう。

① 「深まる心」の、それぞれの文章を「而」「不」「則」「之」「乎」「為」「是」「也」の意味や読み方に注意して訓読しよう。

② 繰り返し音読して、漢文訓読調に親しもう。

〈まとめ〉

① 読書2「孔子―隔世の喜び」を読んで、学ぶ喜びについて感じたことや考えたことを書いておこう。

〈ついた力を確かめよう〉

言葉の力 孔子の思索を場面に位置づけて捉えることができた。

考える力 孔子の思索を生き生きと捉えることができた。

知識や技術 訓読法に慣れ訓読調に親しむことができた。

教育出版「みちしるべ」

「目標と振り返り」

・表現を確かめながら、内容について自分の考えをまとめる。

・文章の特徴を生かしながら音読したり暗唱したりして、漢文の表現に慣れる。

〈確かめよう〉

声の出し方や間の取り方を工夫して、書き下し文を音読したり暗唱したりしよう。

〈深めよう〉

① 孔子の言葉から好きな表現を一つ選び、そのよさを話し合おう。

〈考えよう〉

ほかにも『論語』の言葉を調べ、心に響いた表現や内容について、自分の考えを文章にまとめよう。

三省堂「学びの道しるべ」

「目標」

□ 漢文の響きやリズムに注意しながら読み、孔子のものの見方や考え方を捉える。

□ 『論語』のことをきっかけにして、人間の生き方について自分の考えをもつ。

〈声に出して読もう〉

① 漢文特有の表現やリズムに注意して、音読しよう。

〈考えを深めよう〉

② 『論語』のことばの中から一つ選んで引用し、自分の身のまわりの事柄と関連づけて、考えたことを文章にまとめよう。

〈学びをひろげよう〉

『論語』から生まれた四字熟語に「温故知新」がある。次のA・Bを比べて、「読み方」「表記の仕方」「受ける印象」などの違いについて考えよう。

A 温故知新 B 故きを温めて新しきを知る。

東京書籍「てびき」

座右の銘としたい古人の言葉を選び、自分の考えを書こう。

「目標」

・古人の言葉を読み味わい、自分の文章に生かす。

・古人の言葉を引用し、自分の考えを書く。

〈読み取る〉

- ① 訓読文を見て音読ができるように、繰り返し練習しよう。
- ② 現代語訳と対照させながら、それぞれの言葉に表れている孔子の考え方を捉えよう。

〈考えを深める〉

- ③ 「論語」の言葉に当てはまるような体験や事例を発表し合おう。

〈書く〉

- ④ 座右の銘としたい古典の言葉を一つ選び、その言葉を引用しながら自分の考えを書いてみよう。

光村図書

「目標」

・人間の生き方についての孔子の考え方を自分たちの生活と関連づけて考えよう。

〈冒頭〉 ※第三段落

次に示す四つの章句を声に出して読み、孔子の考え方に触れてみよう。また、「論語」には、他にも数多くの名言が収められている。自分たちの生活に生かしていきたい言葉や、自らを励ます言葉、友だちや後輩に贈りたい言葉を見つけてみよう。

以上の如くである。大略、二つの「学習」が設定されているとみてよいだろう。その一つは、『論語』の内容面に関して、「孔子のものの見方・考え方を理解すること」である。もう一つは、漢文という形式面に関して、「漢文の訓読法に慣れ、漢文訓読調のリズムに親しむこと」である。ただ、第一の「学習」にしても、「今の日本」「自分の生活」「身のまわり」などの文言に顕著に表れるように、まさに二千五百年前と現代とを無理矢理に、一足飛びに結びつけようとするのである。先に述べた現場での授業の現状は、この「学習のてびき」の内容に起因していることは疑いない。中にある、学校図書の教科書では、最後に「ついた力を確かめよう」として「孔子の思索を場面に位置づけて捉えることができた」か、「孔子の思索を生きた生と捉えることができた」かを問うているが、そもそも教科書自体に、孔子の思索を捉えられるような手立てが講じられていないわけではないのだ

から、絵に描いた餅にしかならないだろう。そのような高度な「学習」は、成り立ち得ないはずである。

また、第二の「学習」にしても、ただひたすら音読するだけでは、漢文訓読調のリズムを、雰囲気として多少味わうことができるかもしれないが、訓読法に「慣れる」ことは難しい。この点、三省堂と東京書籍の教科書には、「漢文の読み方」として、「返り点」を指導するコラム的な教材が用意されている（逆にいえば、学校図書・教育出版・光村図書には全く「返り点」について触れるところがない。これでは、漢文訓読の方法に触れることすらできない）。何れにしても、「漢文の読み方」とは「漢文の訓読法」に他ならないわけであるから、まさに「返り点」の問題は避けて通ることができないものである。

六、口絵写真を利用した『論語』の授業

そのような意味において、絶好の教材がある。『論語』の口絵写真を掲載する教育出版と三省堂の教科書である。部分的にせよ、活字本ではない、まさに実物の『論語』（の写真）を取り扱うことができるのである（実際には、拡大して使用する）。

冒頭に述べたように、筆者は古典教材の授業づくりに、当該古典作品の諸本（写本・板本）を活用することを提案してきた。『論語』のほんの一部分とは言え、口絵写真を新たな授業づくりに使わない手はないのである。

六・一 書名について

上が教育出版、下が三省堂の教科書の口絵写真である。



江戸時代に出版された『論語』の本。



『論語集解』
（『論語』の注釈書）

教育出版のものは、下段に「『論語』の本」と注記されているが、一行目に「何晏集解」とあるように、実は何晏の注釈書『論語集解』である。その点三省堂の教科書は、これが『論語集解』であることを明記している。何晏の『論語集解』は、第四節に述べたように、魏の時代に成った「古注」と言われる注釈書であって、『論語』そのものではない。推測の域を出ないことではあるが、応神天皇の時代、西暦四〇〇年頃に将来された『論語』とは、おそらくこの『論語集解』だったのではないだろうか。少なくとも伝存する古い時代の『論語』は、ほとんど『論語集解』であるので、古くは『論語集解』を主なテキストとして『論語』学習が行われていたものと推察される。「新注」の朱熹『論語集注』も、中世あたりから散見するようになるが、爆発的に広まるのは、周知の如く、朱子学が江戸幕府の御用学問となつてからのことである⁽⁹⁾。このように、『論語』を学習するに際して、何晏『論語集解』と朱熹『論語集注』は、決して外すことができない資料名なのである。

六・二 典拠について

教科書の口絵写真の典拠についても、甚だ興味深いところである。どこから採られた写真かということである。

東京大学東洋文化研究所蔵『論語集解』（板本）



これは、教育出版の教科書における口絵写真の典拠と推測されるものである。東京大学東洋文化研究所蔵（安田文庫旧蔵）正平本『論語集解』で、正平本（あるいは正平版）と称されるように、日本の南北朝時代、正平一九（一三六四）年の刊記を有する板本である⁽¹⁰⁾。この本文は、中国の『古逸叢書』や『四部叢刊』にも採られた如く、『論語』の本文として極めて高く評価されているものである⁽¹¹⁾。東洋文化研

究所蔵本には、序文・題字下に「米澤蔵書」の蔵書印（朱印）が押されているので、上杉家の直江兼続旧蔵と知られ、室町時代中期に板行されたものと目される。よって、教科書下段の「江戸時代に出版された」なる注記は、全くの誤認である。加えて、現に施されている訓点や上欄注・傍注などと合わせ、単なる「出版された」本ではないことも諒解しておかねばならない。ちなみに、この本文は板行時は全くの無点、いわゆる白文であったが、その後、墨点（カナ・返り点・上欄注・傍注など）、朱点（合符・合点・句切点など）が加添されている。教師泣かせの口絵写真、注記である。

早稲田大学図書館蔵『論語集解』（板本）



一方、三省堂の教科書の口絵写真は、この早稲田大学図書館所蔵の『論語集解』によっているものと推測される⁽¹²⁾。「醍醐／忠順／蔵書」の蔵書印（朱印）も全く同じである⁽¹³⁾。これは、江戸前期の儒学者・伊藤東涯が考訂した『論語集解』で、享保一七（一七三二）年に板行、寛政二（一七九〇）年に再板したものである⁽¹⁴⁾。この本文には、すでに板行時に訓点（カナ・返り点・合符）が付刻されている。この付刻についても、確認しておくべきであろう。

六・三 訓点について

こうした訓点は、教科書の「漢文の読み方」と関連付けて活用することが可能だと考える。

教育出版と三省堂の教科書は、偶然にも共に『論語』学而篇の章句「学而時習之、不亦説乎。」を掲げている。光村図書も同じ箇所を採っている。この部分の読み方はほとんど同じであるが、これに続く「有朋自遠方来、不亦楽乎。」の部分には、二種類の読み方がある。

教育出版の教科書は、「有^リ朋^{ヨリ}自^ニ遠^{タル}方^一来^{タル}、不^ニ亦^{シカ}樂^{シカ}一^乎。」として、「朋有り遠方より来たる、亦樂しからずや。」と訓読する。現代語訳は、「友人が遠くから訪ねてくる、なんと楽しいことではないか。」とある。

三省堂の教科書は、「有^リ下^{ヨリ}朋^{ヨリ}自^ニ遠^{タル}方^一来^{タル}、不^ニ亦^{シカ}樂^{シカ}一^乎。」として、「朋、遠方より来たる有り、亦樂しからずや。」と訓読する。現代語訳は付されていない（光村図書は三省堂と同じ）。この教科書には、第五節に触れたように、コラム的な「漢文の読み方」が続いて用意されていて、「返り点の確認」項目中の「③上・下点」の用例として、再度「有^リ下^{ヨリ}朋^{ヨリ}自^ニ遠^{タル}方^一来^{タル}。朋、遠方より来たる有り。」が掲げられ、訓読する漢字の順番が、左傍に「6 1 4 2 3 5」の如く示されている。明らかに、「上・下点」に従って、最後に「有」字を読む構文と理解される。

つまり、この部分の訓読の仕方には、「友人がいます、遠方からきます」のように、二段階で解釈する方法と、「友人で、遠方から来る人がいます」のように、全体を一まとまりとして解釈する方法が認められるのである。その中で教育出版の教科書は、前者の解釈を志向する訓点を付しながら、その現代語訳は後者の解釈に到り着いているのである。まさに矛盾である。

この部分の文意は、教育出版の教科書に示されるように、「友人が遠くから訪ねてくる、なんと楽しいことではないか。」の如くに解釈するのが相応しいように考えられる。しかし、本来は三省堂や光村図書に示される「有^リ下^{ヨリ}朋^{ヨリ}自^ニ遠^{タル}方^一来^{タル}、不^ニ亦^{シカ}樂^{シカ}一^乎。」が適当だと考える。事実、この部分の訓読法は、古い時代はほとんどこの方式であったのであるが、時代が降るにしたがって、「有^リ下^{ヨリ}朋^{ヨリ}自^ニ遠^{タル}方^一来^{タル}、不^ニ亦^{シカ}樂^{シカ}一^乎。」の方式が現れ、次第にその訓読法が多数を占めるに至ったように推察される。ちなみに、教育出版の『漢文大系』の本文を確認すると、「有^リ下^{ヨリ}朋^{ヨリ}自^ニ遠^{タル}方^一来^{タル}、不^ニ亦^{シカ}樂^{シカ}一^乎。」であり、三省堂の『新釈漢文大系』もまた、「有^リ下^{ヨリ}朋^{ヨリ}自^ニ遠^{タル}方^一来^{タル}、不^ニ亦^{シカ}樂^{シカ}一^乎。」であった¹⁶⁾。

ただ、問題の口絵写真を参照すると、ことはそれほど単純ではないことがわかる。

すなわち、教育出版の教科書の口絵写真を詳細に見ると、どう見ても「有^リ下^{ヨリ}朋^{ヨリ}自^ニ遠^{タル}方^一来^{タル}、不^ニ亦^{シカ}樂^{シカ}一^乎。」であって、教科書本文に掲載さ

れる「有^リ下^{ヨリ}朋^{ヨリ}自^ニ遠^{タル}方^一来^{タル}、不^ニ亦^{シカ}樂^{シカ}一^乎。」ではないのである。むしろ、三省堂や光村図書の教科書の訓読の仕方と同じなのである。

逆に、三省堂の教科書の口絵写真を詳細に見ると、どう見ても「有^リ下^{ヨリ}朋^{ヨリ}自^ニ遠^{タル}方^一来^{タル}、不^ニ亦^{シカ}樂^{シカ}一^乎。」となっていて、教科書本文に掲載される「有^リ下^{ヨリ}朋^{ヨリ}自^ニ遠^{タル}方^一来^{タル}、不^ニ亦^{シカ}樂^{シカ}一^乎。」ではないのである。教育出版の教科書の訓読の仕方と同じなのである。

そもそも漢文は、中国人が漢字を用いつつ、中国語を記述したものであるから、本来はいわゆる白文で、訓点（カナ・返り点など）は全く施されていないはずである。これを日本人が、日本語でもって読解しようとした時に、中国語と日本語との間に言語的な相違があるために、初めて訓点という記号が必要となるのである。教科書本文の『論語』の訓読の仕方と、口絵写真の『論語』の訓読の仕方に異なりが見られることは、むしろ漢文の訓読とはいかなるものかを、原点に立ち返って一から考えさせてくれる、格好の材料・手立てになるのではないかと考えている。

七、むすび

最後に、これまで述べてきた『論語』の授業改善の方法について整理したい。

(1) 漢文教材のヴァリエーションを拡充すること

現行の中学校教科書における漢文教材と言えば、散文の『論語』と、韻文の、唐代の漢詩数編が採択されているにすぎない。この点、同じ古典でも古文分野では、奈良時代から江戸時代まで韻文と散文がそれなりに用意されている。配当時間数との兼ね合いがあるため、それほど多くの教材を採択することは難しいだろうが、今少し時代もジャンルも広げることが期待される。教育出版の教科書に良寛の漢詩が見られたように、日本人が作成した漢文を取り上げるのも意味があるだろう。例えば、『古事記』や『日本書紀』といった早い時期の変体漢文や、林羅山、新井白石、荻生徂徠、頼山陽など近世の学者による文章、近現代の森鷗外や夏目漱石、諸橋徹次などによる漢詩文も興味深い。

(2) 『論語』と孔子に関する周到な説明が必要であること

現行の教科書の記述内容では、『論語』とはいったい何なのか、いつどのように成立し、どのように展開したのか、日本にはいつ伝来し、どのように受容、学習されてきたのかなどについて、全く応えることができていない。『論語』という書名、何晏『論語集解』、朱熹『論語集注』との関係について説いた教科書も知らない。同様に、孔子の説明もあまりに簡略にすぎるだろう。また、『論語』の教えの中核をなす「仁」や「礼」についての解説がほとんどないため、「学習の手引き」で求められている「孔子のものの見方・考え方を理解すること」は全く不可能である。ましてやそれを受容、学習した中国人や日本人の、「ものの見方・考え方」を理解することは（推測することすら）無理である。丁寧で周到な説明が、是非とも必要であろう。

(3) 孔子の時代と現代との相違を認識すること

第三節や、第五節「学習の手引き」で述べたように、中学校における現行の『論語』学習では、「今の日本」「自分の生活」「身のまわり」などの文言が氾濫しているように、孔子やその弟子たちが活躍した二千五百年前と現代とを、無理矢理に「一挙に結び付けようとする傾向がある。それが「学習の手引き」の内容に起因することも確認した。厳に慎むべきことである。まずは、孔子の時代における『論語』の中身（教え）を考え、孔子がなぜそのような発言をしたのか、その背景には何があったのかなどについて考察した後、現代に思いを及ぼしても遅くないはずである。ただ、その場合も、現代に至るまでのその時々々の『論語』の受容、学習の仕方にも触れるべきであろう。

(4) 漢文学習には「返り点」の学習が不可欠であること

「学習の手引き」では、「漢文の訓読法に慣れ、漢文訓読調のリズムに親しむこと」を求めているが、漢文の訓読法に慣れるためには「返り点」の学習が不可欠である。漢文訓読調の音読を繰り返し、リズムに慣れるためには、実は「返り点」を理解し、慣れる必要がある。そもそも漢文の訓読法を学習することは、もともと訓点（カナ・返り点など）が施されていない白文を読解するために、どこにどのような訓点を加えれば日本語として

解釈できるかを探ることに他ならない。加えられた訓点の有り様を知れば、当該の漢文の解釈につながるのである。

(5) 口絵写真を最大限利用すべきこと

古典教材の授業づくりには、当該古典作品の諸本（写本・板本）を活用すべきことは何度も述べてきた。その意味において、教育出版社と三省堂の教科書に『論語』の口絵写真があることは、まさにラッキーなことである。ほんの一部分とは言え、実物の『論語』（の写真）を新たな授業づくりに使わない手はないのである。教科書本文での訓読の仕方、その出典本文で確認された訓読の仕方、さらに口絵写真の本文で視認された訓読の仕方の三つを比較・検討し、様々な矛盾を総合的に考察することによって、漢文の訓読とはいったい何なのかについて、原点まで立ち返り一から考えさせてくれるのである。本物の持つ力を、改めて思い知ることができるだろう。

〔注〕

- (1) 何れも拙稿、「古典教材の授業づくり―『平家物語』敦盛の最期をめぐって―」（『新大國語』第三九号、二〇一七年三月三十一日）、「古典教材の授業づくり―『平家物語』扇の的をめぐって―」（『新潟大学教育学部研究紀要』第九卷二号、同年三月三十一日）、「国語学的手法を用いた『平家物語』の教材分析」（『新大國語』第四〇号、二〇一八年三月三十一日）、「『平家物語』の新たな授業づくりの方法と実践（理論編）」（平成28～30年度科学研究費研究成果報告書、二〇一九年三月三十一日）、「徒然草」の新たな授業づくりの方法―第九二段をめぐって―」（『新大國語』第四一号掲載予定）、「古典教材の授業づくり―『おくのほそ道』平泉・光堂の句をめぐって―」（『こ』とばとくら』第二十七号、二〇一五年一〇月三十一日）。

- (2) 「魯迅『故郷』の新たな授業づくりの方法―井上紅梅訳・原文との比較―」（『新潟大学教育学部研究紀要』第一三卷一号、二〇二〇年一〇月三十一日）。

- (3) 一覧に示したように、漢詩は杜甫、李白、孟浩然が中心で、他に王維、柳宗元、王翰などが採られているが、何れも唐代の詩人である。そ

- の中で、教育出版の教科書には日本・江戸時代における良寛の漢詩「擔薪下翠岑」が採られている点に独自性がある。
- (4) 『漢文大系』(一九八四年、富山房、初版一九〇九年)の出典は、江戸時代後期の儒学者・安井息軒の『論語集説』である。何晏の『論語集解』を底本として、朱熹の『論語集注』を始め、日中の諸注釈書を広く集めており、高く評価されている。『新釈漢文大系』(一九八二年、明治書院、初版一九六〇年)は、朱熹の『論語集注』を底本とし、清・劉宝楠の『論語正義』を参考としたものである。
- (5) 二〇一九年九月一日、同校・小黒成寛教諭の公開授業による。
- (6) 何れも電子辞書版の記載内容によった。
- (7) 日本の正史『日本書紀』によれば、応神天皇一五年に百濟から阿直岐が遣わされ、太子・菟道稚郎子の師となったこと、翌一六年には王仁が遣わされ、同様に菟道稚郎子の師となったとされている。『日本書紀』には阿直岐や王仁が将来したテキストについての記述はないが、『古事記』によれば、この時王仁(『古事記』では和迹吉師、阿直岐は阿知吉師と表記される)は、「論語十卷・千字文一卷、并十一卷」を将来したとの記述がある。これが日本への漢字漢文の「正式な」伝来の時期とされている。応神天皇一六年は、『日本書紀』にしたがえば西暦二八五年に当たるようであるが、応神天皇を実在の人物として見た場合、およそ西暦四〇〇年代初頭のことではないかと推測されている。
- (8) 伊藤仁斎『論語古義』、荻生徂徠『論語徴』、安井息軒『論語集説』などがある。何れも、朱熹以前の解釈を追究しようとするもので、『論語』註釈史上優れた著作とされている。
- (9) 江戸時代前期の朱子学派の儒学者・林羅山(道春)が、將軍・徳川家康の侍講となり、外交文書や諸法度の起草などに当たるようになってからである。林羅山については、『日本大百科全書』に、「天正」一一年八月に京都に生まれる。一五九五年(文祿四)に臨済宗の建仁寺に入って、儒学と仏教を学んだが、一五九七年(慶長二)に家に帰ったのはもっぱら儒書を読み、朱子の章句、集注(四書
- の注釈)を研究して宋学に傾倒し、仏教を排撃した。一六〇四年より藤原惺窩に師事し、その推薦で一六〇七年徳川幕府に召し抱えられ、以後、家康、秀忠、家光、家綱の四代將軍に仕え、侍講として儒書や史書を講じた。またつねに將軍の傍らにあつて、儀式・典札の調査、法度の制定や古書・古記録の採集・校訂、外交文書の起草にあたった。(中略)家康が羅山を召し抱えたのは、羅山の信奉した朱子学を理解し、それが新しい封建制度を持することを認めたからではなく、主として羅山の学殖を政治の実際に役だてようとしたからであろうが、しかし朱子学の思想と徳川封建政治の理念との間に内面的関係が存在し、この関係が羅山の子孫をして代々大學頭として幕府の文教をつかさどらせ、朱子学をして幕藩体制を支持する官学たらしめたゆえんと考えられる。」のように説明されている。
- (10) 東京大学東洋文化研究所蔵。「安田弘先生捐贈正平本『論語』等十一種」(橋本秀美・元助教解説説)による。<http://ricas.ioc.u-tokyo.ac.jp/gsj/html/036.html> 2019.108 アクセス。橋本が指摘するように、本資料は川瀬一馬『日本書誌学之研究』(一九四三年、講談社)にも記述がある。
- (11) 『古逸叢書』(一八八四年、黎氏日本東京使署)は、清末に黎庶昌によって、中国ではすでに失われた善本を日本で収集し、覆刻・出版された叢書である。『四部叢刊』(一九一九―一九三六年、上海商務印書館)は、中華民国の張元洛らが、長期に亘って四部(經・史・子・集)の主要な古典を選び、影印・出版した叢書である。初編、続編、三編を合わせて四六八種の資料が発刊された。
- (12) 早稲田大学図書館蔵。書誌に享保一七年刊の再板とある。https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ro12/ro12_00525/index.html 2019.108 アクセス。
- (13) 醍醐忠順は、江戸末期の公卿。仁孝天皇・孝明天皇・明治天皇の三代に仕えた。
- (14) 伊藤東涯は、(注8)に掲げた『論語古義』の著者として知られる、江戸初期の儒学者・伊藤仁斎の長男である。

(15) 注(4)に掲げたように、『漢文大系』は安井息軒の『論語集説』を出典とするが、『論語集説』は何晏の『論語集解』を底本としている。一方『新釈漢文大系』は、朱熹の『論語集注』を底本としている。基づく資料が異なるにも関わらず、二つながら「有_下朋、自_二遠方_一来_上、不_二亦楽_一乎。」の方式の訓読をしているのである。このことは、『論語集解』と『論語集注』との違いによって、訓読の仕方が異なるものではないことを示唆するものである。

〔付記〕

本稿は、二〇二〇年三月一四日・一五日の両日、新潟大学東京事務所（東京工業大学キャンパス・イノベーションセンター）において開催の、本年度第二回・日本語記史研究会において口頭発表する予定だった内容が骨子となっている。同研究会は、残念ながら新型コロナウイルス感染症拡大の影響により中止のやむなきに至った。

なお、本稿はJSPS科研費（基盤研究（B）、課題番号19H01667）の成果の一部である。
（二〇二〇年三月三日成稿）